

大学体育の価値向上に向けた一考察 —教育実践における目標・教授・学習に着目して—

松田 裕雄¹⁾, 吉岡 利貢¹⁾, 河村レイ子¹⁾, 桐生 習作¹⁾, 金谷麻理子¹⁾
武田丈太郎¹⁾, 門野 洋介¹⁾

Study of the value of colleague physical education :
As 3 viewpoints(Object, Teaching, and Learning) on educational practice

Yasuo MATSUDA¹⁾, Toshitsugu YOSHIOKA¹⁾, Reiko KAWAMURA¹⁾,
Shusaku KIRYU¹⁾, Mariko KANAYA¹⁾, Jotaro TAKEDA¹⁾, Hirosuke KADONO¹⁾

抄 録

本研究は、大学体育の教育実践の現場に着目し、教育目標（伝授すべきこと）、教員の教授（伝授しようとしたこと）、学生の学習（伝授されたこと）の間にどのような整合・不整合性が認められるのかを調査し、今後の大学体育の価値向上に向けた方向性を示唆することを目的とした。

研究方法はT大学において共通科目「体育」を受講した卒業生および担当した教員を調査対象とし、アンケート調査を行った。内訳は、卒業生386名、教員12名である。アンケート調査は「健康・安全・体力の保持増進と向上」、「人間・人間関係の形成」、「スポーツの普及と振興」という3つの観点(大学体育三大意義)について実施した。評価尺度は、6（とても思う）から1（まったく思わない）の6段階とし、これを卒業生の場合は「学習得点」、教員の場合は「教授得点」とした。

大学体育三大意義におけるそれぞれの分野の「教授得点」と「学習得点」を比較したところ、全ての観点において、教授得点と学習得点の間に有意な差が認められた。また、「人間・人間関係の形成」において、教授得点が最も高い値を示したのに対して、学習得点は最も低い値であった。

因子分析の結果より、T大学における大学体育活動の更なる充実と価値向上に向けた課題として、以下の2つが示唆された。

(1) 大学体育三大意義を踏まえた教育実践の場を目的整合的に再設計し、教員の教授意識に組織としての一定の合意性及び一貫性を図っていくこと。

(2) 三大意義と教育目標を具現化し、整合性の高い学習成果を図っていく為の具体的な教授方法について研究を図っていくこと。

大学体育界全体が大学体育の価値向上に向けて取り組むべき課題としては、原点である大学体育三大意義を具現化していく教授法を日々追究していくことで、高い学習成果を発揮し教養教育に欠かせない存在へと体育の教育的価値を高めていくことが重要であることが示唆された。

キーワード：大学体育三大意義、教育目標、教授得点、学習得点

KeyWords : Three senses of college physical education, Aim of education, Score of teaching, Score of learning

1) 筑波大学体育系 Faculty of Health and Sport Sciences, University of Tsukuba

松田裕雄、吉岡利貴、河村レイ子、桐生習作、金谷麻理子、武田丈太郎、門野洋介／
大学体育の価値向上に向けた一考察 ―教育実践における目標・教授・学習に注目して

1. 問題と目的

1.1 大学教育における体育科目の価値

日本の大学教育において体育(以下「大学体育」)が必修科目として導入されたのは1947年の大学設置基準第22条(以下「基準22条」とする)が制定された時である。これは戦後の新制大学教育における1つの大きな特徴であったが、導入当初から大学体育の教育的価値(以下「価値」とする)や存在意義についての議論が長く続いたことは周知の事実であろう(水野 1984)。この議論を形式上終息させたのが、1992年に施行された大学設置基準の大綱化である。これによって大学体育を必修科目とするか否か、つまり大学体育にどのような価値を見出すかは、各大学の教育理念に基づいた裁量に任されるという形となった。この結果、各大学は必修科目としての単位縮小、自由科目化、もしくは廃止のいずれかに転じていくことになり(小林ら 1995)、それまで常に疑義を醸し、批判を受けてきた¹⁾大学体育の正課必修という価値は遂に大きく減退することとなる。

1.2 大学体育の意義と正課必修の価値

大学体育の正課必修としての価値を約半世紀に渡って維持し続けてきた背景の1つに、大学体育の意義に関する積極的な研究や主張は欠かせない。

基準22条において教養教育の必修科目とされた大学体育の設置目的²⁾について、千賀(2002)は以下3つに整理している。1)健康、安全の保持増進と体力の向上(ひとの健康に関する理解)、2)人間関係の形成(社会の指導的役割を担うに必要な個人・集団の形成)、3)スポーツの普及と振興(スポーツ活動の指導、スポーツ指導者の育成、社会体育の実施指導)である。

しかし大学教育の主要中枢機関(日本学術会議、中央教育審議会、日本私立大学連盟、大学基準協会)は、このような意義を認めつつも、体育が大学における正課必修となることには設置当初から強く抵抗し続けていた(文部省 1970・1971、日本体育学会体育原理専門分科学会編 1991)。表1は、これら機関が大学体育の価値に疑義を投げかけた主な発表を整理したものである。

これに対し、多くの識者達及び機関組織が大学体育の意義について様々な角度から考察し、その価値の高さや必修の必要性を訴えてきた。表2は、そうした訴えを記録した主な論文や文献資料を著者が整理したものである。

表記のとおり、識者達が訴えている大学体育の意義は設置当初の目的から何ら乖離することなく、大凡において一貫していることが窺える。こうした意義や識者達による積極的な主張は、約半世紀にわたって正課必修としての価値を維持し続け、

表1 主要中枢機関による答申及び報告

機関	議題	内容
大学基準協会 (1959年)	大学体育の基準 (大学における保健体育の在り方)	(前略) 一方、体育実技によって、青年の運動欲求を満足させ、且つ感情の良い捌け口を得させ、健康の保持増進に役立たせる。
日本学術会議 (1961年)	内閣総理大臣に対する勧告 - 大学制度の改善について(体育保健の単位に関して) -	・大学の正課としての体育は、現状の実態からみて不必要である。クラブ活動の調整で十分。これを廃したらどうか。 ・体育保健は単位制度からはずし、学生の保健指導、健康管理の面から別途そのあり方を検討し、特にそのための人的、物的条件を充実させること
中央教育審議会答申 (1970～71年)	高等教育の改革に関する基本構想試案	・課外体育重視。自発的意思によって自主的に選んで実施する課外活動の指導を充実させ、正課としての扱いは、各大学の裁量にまかせるべきである ・保健体育を全ての高等教育機関で正課とし、卒業要件として一律に単位を修得していることは、あまりにも画一的であり、それだけでは本来の目的は達成されない。
日本私立大学連盟報告 (1981年)	大学設置基準に関する検討結果	・大学教育における保健体育科目の位置づけ、意義、目的を明確にし、選択科目とすることなどの可能性を含めて現行規定の再検討が必要。 ・卒業要件との関連で、体育実技については各大学の自主的判断に委ねることが望ましいと考える。
大学基準協会 (1983年)	大学設置基準に関する問題点 (第一次中間報告)	保健体育科目履修を卒業の要件に含めるべきであるか否かについては、それが大学教育本来の在り方との関連で検討すべきであるばかりでなく、保健体育科目の具体的な履修の方法等についても問題がないわけではないので、大学において保健体育科目を設置している主旨、目的等を根本的に検討する必要がある。

表2 大学体育の意義に関する識者達及び機関の見解一覧

著者(出版年)	着目する社会背景	価値や意義
大道等 (1998年)		1.体育科学の知識体系を肉体的に経験する。 2.自己の身体運動や日常生活を営むに当たっての知恵をあみ出そうとする知的努力の経験ができる
峯重新二郎 (1960年)		1.健康の維持増進 2.健全な社会的道徳精神の涵養 3.正しき見種の人間関係の認識と実践 4.社会生活に対する予備訓練としての教養を体得してその態度をつくり出す。 5.社会生活を豊かにするためのレクリエーション活動についての理解と技能の体得。
福岡孝純 (1993年)	現代技術文明がもたらす人間疎外と環境破壊に対し、今後どのような社会構造や生活環境、生活様式を構成していくかということが大きな課題	身体的教養(スポーツヒューマニティ)提供→全人的人格形成、自己形成の場(=知行合一) 1.個的領域 -自己実現活動、自己創造活動、健康体力活動、ヴァイタリティ涵養、自発的制御能力、集中能力、自己信頼能力 2.人間関係領域 -フェア、チームワーク、リーダー・フォロワーシップ 3.環境対応領域 -ロールシェアリング、セーフティ、チャレンジ
森田啓 (2000年)	人間存在を重視し、学習社会を確立することが必要とされている社会	1.自己決定とそれに付随する責任能力を獲得する場。 2.生涯に渡って他者や環境に配慮しながらスポーツを実践する能力を身につけさせる場。
森田啓 (2000年)		1.広い視野で物事を捉え、専門領域以外の事柄について、自ら課題を発見し、その課題を解決していく態度・能力を獲得させる活動
上智大学保健体育研究室(2000年)	文明化社会がもたらす生活環境の省力化、人間関係の希薄化、運動不足病、精神的問題の多発	1.健康・体力向上 2.他者に気付き共に生きる社会性の育成 3.自律的に問題の解決へと向かえる能力の獲得 4.身体的、社会的、精神的健康等広範囲に渡る「生きることのクオリティー」を総合的に向上させる能力を養う。
田中菊子 (1986年)		1.自己開発 2.品性の陶冶、他者との連帯(団結、礼儀、協同、相互扶助等々) 3.成人病予防としての運動の必要性と正しい運動処方の知識獲得 4.生涯体育への動機づけ
佐藤善治 (1992年)	スポーツの概念が、競技スポーツに留まらず、「健康・楽しさ・豊かさ」に接近する教養となり始め、産業化を果たしつつある。	1.心身の健康増進 2.国民のスポーツ文化に対する教養を高めること 3.体育、スポーツに関する研究の拠点を大学につくり根付かせること 4.人間発達や人格形成
松岡信之 徳山郁夫 (1996年)	大学教育の大衆化	1.技術を身につけ、運動文化としてのスポーツを理解し、楽しみ、生活を豊かにする 2.基本的な体力を維持・増進する 3.保健体育に関する学問的知見の獲得、実体験に基づく自己への客観的考察
徳山郁夫 松岡信之 (1997年)	身体と環境とのギャップが広がり、自己の姿を益々見失っていく人工環境(知行分離)	1.自己と他者に意識を向けて自己の見直しを図れる知行合一の育成
千賀康利 (2002年)	1.多様化・個性化の中で複雑化する人間環境 2.科学の進歩がもたらす様々な適応機能の低下(特に健康)	1.健康・安全の保持増進と体力の向上 2.人間関係の形成 3.スポーツの普及と振興
宮下充正 (1993年)		1.高校以前に学習してこなかったスポーツ種目の技能を身につけさせるもの 2.体を動かす能力(健康・体力)の保持増進
大塚 隆 (1999年)	1.生活環境の変化 2.受験戦争の激化 3.知識偏重の教育 4.モラルの欠如	1.「からだ」の活動を通して「自己」への気付き 2.人との関わりにおいて「他者」「社会」「社会の中の自分」への気づき 3.相互交流による「チームワーク」「協調」「協力」の体験
大塚隆他 (2002年)		1.社会性や豊かな人間性の涵養
小林寛道 (1995年)	高齢化社会	1.スポーツ 2.体力トレーニング 3.セルフコントロール
水野哲也 (1990年)	1.産業構造の変革 2.高度情報化社会の進展 3.急速な国際化への要請	1.自己管理能力の育成 2.健康・体力づくり 3.道徳性の学習
松浦義行 (1991年)		1.適切な運動・スポーツの量と質及びその実践の方法に関する知識と技能及び実践する態度を身につける
浅田隆夫 (1985年)	1.産業の高度化、都市化による人間性の疎外化・孤立化 2.マスコミがもたらす人間の定型化 3.科学技術発展による生活への不均等な適用	1.将来社会体育や社会福祉の発展に寄与できる実践的能力の獲得 2.適切な身体運動の必要性認識と能力や態度の育成 3.能動的な社会性の育成や人間性の理解 4.スポーツ・レクリエーションに必要な資質、能力を高め、望ましい態度の育成
森田啓之他 (1994年)		1.生涯にわたってスポーツ文化を主体的に享受できる人間の育成
野崎武司 (1996年)		1.主体形成・他者との共感を核に何かを新しく生み出していく力の養成
機関	課題	内容
全国大学体育連合 (1973年)	大学保健体育の基本構想	人間生活の基本である健康・体力に対する認識を深めるとともに、これを積極的に高め、あるいは維持していく方法を習得し、且つ実践する能力を養うものである。その具体的な役割は、 1) 人間の生命・健康に関する科学的知識の修得 2) 社会の指導者としての健康観・体育観を確立し、人間の健康と福祉に寄与できる能力を高める 3) 身体活動を媒介として学生の健康の保持・増進を図る。 4) 心身の不均衡な発達防止・是正のため、適切な運動の必要の認識と実践の能力を養う 5) 能動的な社会性の育成 6) 余暇善用の為の運動技術の向上

支えていく一翼を担ってきたことは間違いないであろう。

しかし大綱化にて証明されたように、大学体育の効用を様々な角度から説いたどのような意義も、この科目を恒常的に必修であり続ける程の普遍的なものにまでは、その価値を高めていくことはできなかった。

1.3 意義を具現化する教育実践の重要性

大学体育に、必修科目としての普遍的な価値が宿らなかった要因についてはいくつもの見解があるだろう。そのうちの1つに、大学教育自体と大学体育自体に、それぞれの意義を具現化する力が発展途上であったというという見解が挙げられる。

1947年に正課必修が承認された背景について分析した田中（1986）や加藤（全国大学体育協議会編 1960）による見解を整理すると、以下7つに分けられる。1) 米国教育使節団の来日による影響及び勧告、2) 当時の米国大学の90%以上が正課体育を設けていたという状況、3) 新制大学の多くが旧制高校、専門学校との合併等で構成された為、学生の健康上より必要であるとの見解が示されたこと³⁾、4) 当時の結核対策、体育がただ単に運動を通しての教育という立場から保健と体育との係わりを持った立場をとっていたという立場、5) 戦後日本の教育改革に決定的な影響力をもっていた南原繁（元東京大学総長 当時中央教育審議会会長）が大学で体育や音楽を必要とする一般教育観を持っていたこと、6) これらを受け、文部省に学校体育研究委員会が設けられたこと、7) 大学基準協会が発足し新制大学のあり様を大学自らの手で作り上げることが目指されたこと。

このような背景から窺えることは、設置当初より大学体育の意義への深い教育的理解が必ずしも強力に存在していたわけではなかったということである。田崎（2001）は、川村（1987）のいう新制大学3つの課題⁴⁾の内、新設された3つ目の課題「人間形成をするもの」という大学の新たな機能に対する理解が、そもそもの戦後の大学教員に

十分に理解されていなかったことを指摘すると同時に、一方で大学体育を担当する者もこのような新たな課題を達成することこそが大学教育に教養教育として体育が導入された経緯であるということを理解していたかどうかは疑問であるとしている。

確かに当時の大学体育は、保健や衛生上の対策という立場では明確な根拠実態があって設置されたものといえるが、学問としての立場には一定の成熟があって設置されたわけではなかったという背景がある。むしろ今後の学問的発展が設置の要件として示されていた（佐藤 1992）。こうした事実を受け、千賀（2002）は「いきなり必修と言う制度で出発した為、制度保証が前面に出てしまったことと18歳人口の増加に伴う大学バブル時代を迎えるに至ったことで、設置当初の課題が忘れ去られてしまった。そしていわゆる『必修に胡坐』と言われるに至った」とし、改めて大学体育教員の質の向上、教育の実行力の必要性を訴えている。

また田崎（2001）も同様に「我が国の大学が経験したことのない保健体育科目の必修制を実現し、手探りでその充実を図った新制度揺籃の時期にあって、それが新制であるがゆえに当面公的評価を控えられた‘大学体育’が、そのモラトリアム期のそれを越え出ることができなかった」とし、体育の目的や学習課題の質を問うことの必然性を痛感している。

このように、大学体育が未開拓の新たな試みであった一方、新制大学もまた発展途上であった当時の状況を受け、佐藤（1992）は「理念を大学が公的に行うカリキュラムと結合させ、有効な教授=学習過程を作り出せてこそ、大学における保健体育の教育と研究の存在価値があるとの認識と実際の解決努力を満たす必要が、大学体育担当者にはあった」としている。

新制大学における正課必修の価値と体育の価値、両者手探りでありながらも、その間にある距離感を縮小していくために与えられた時間が、基準22条の設置から大綱化までの約半世紀であったのか

もしれない。この間に、体育設置要件の1つ「体育分野における研究教育力の向上」、すなわち大学体育の意義を、教育実践を通じ学習成果や学問成果として収め、この科目に名実と共に必修科目としての揺るぎない普遍的価値を構築していくということこそが現場体育教員に委ねられた大きな任務であったのではなかろうか⁵⁾。

1.4 研究目的

こうした状況を踏まえ、これまでの大学体育の意義とその教育実践という側面に疑問を投げかけ、また改善の必要性を論じる識者は多くいる。

田中（1986）は、先述した新制大学における3つの課題の内、前者2つに傾斜するあまり（研究に熱心にならざるを得ないあまりに）、「体育実技の授業について、画一的にゲーム中心になってしまい、ややともすれば教育という立場を忘れがちになっていたのではないか」としている。野坂（1989）は、繰り返される大学体育の在り方を巡る論議に対し、「決して行政や大学設置者の偏見によるものではない。教員の指導力不足に問題がある。今までに明文化された理論が美辞麗句を並べたに過ぎないという批判を拭えないという現実がないとはいえない。学生に『大学体育は意義がある。価値がある』と伝わっていないのであれば、それは指導力不足」とし、理論・実践・学生評価の三者の再調整を現場教員に痛切に訴えている。栗巢（2000）は、体育・スポーツ嫌いができる原因の1つに学校教育現場における「体育の授業の存在」と「体育担当教員の指導力の未熟さ」を挙げている。森田ら（2008）は「教養教育の理念を全うできる指導手法を自らの研究と結び付いた形での授業展開を実施することで、大学教育としてふさわしい体育の内容を提示する必要がある」⁶⁾とし、体育教員へ教育実践を通じた能動的・主体的な動きを求めている。

千賀（2002）は、「委員会、教授会において十分に合議してきたにも関わらず、実際の授業ではカリキュラム・シラバスが既定どおりに運用されていない。カリキュラム運用能力の不足という

体育教員の質の問題」を挙げ、単に履修指導という枠組みにとらわれた教育指導の欠点を指摘している。また田崎（2001）も「健康や体力などのような直接的な効用を標榜するテーマを掲げるのではなく、改めてスポーツ本来の意味に戻り、その理念の実現に向かう姿勢が要求されている」と具体的な教育内容の充実を訴えている。

このように意義の実践、理論と教育内容の一致を教員に希求する見解は枚挙にいとまがない。実際、国立大学協会⁷⁾や大学審議会⁸⁾も過去に教員の指導力不足を直接指摘したという事例もある。

しかし、実際に現場の指導にどのような問題があるのか、すなわち多くの識者達が主張してきた大学体育の意義が、実際に教育実践の場ではどれほど具現化されているのか、あるいはされていないのか、この実態について調査し、評価した研究はほとんど見受けられない。

そこで本研究では、大学体育の意義や効用を具現化していく教育実践の現場に着目し、意義と実践の間、または実践現場内における目標、教員、学生の間、それぞれにどのような整合・不整合性が認められるのかを調査することで、今後の大学体育の価値向上に向けた方向性を示唆することを目的とする。

このことはまさに我が国に大学体育が設置された意義や目的への原点回帰であり、新たな一歩を踏み出していく為に必要不可欠な事項である。また本研究は、日本において必修体育科目が活発に展開されている大学の1つ、T大学体育センター（以下「T大学」）の教育展開に着目する。

2. 研究手法と予備知識

2.1 研究の視点

本研究は、大学体育の意義及びこれを具現化していく教育実践の現場の2つに着目する。そのため、両者をどのような視点で捉えるのかという定義付けが重要である。というのも前者は後者を評価する枠組みにも該当し、後者には更なる細かい分化が必要だからである。

松田裕雄、吉岡利貢、河村レイ子、桐生習作、金谷麻理子、武田丈太郎、門野洋介／
大学体育の価値向上に向けた一考察 ―教育実践における目標・教授・学習に注目して

まずは大学体育の意義については、先述したように多くの議論は交わされてきたものの、我が国で大学体育が発祥した原点からはおよそ逸脱していないことより、基準22条における設置目的を基点とする。よってこれを整理した先述の千賀（2002）の見解を適用し、これを本研究における大学体育の意義、効用と定義づけ、以下3つに要約する（以下、「大学体育三大意義」とする）。1) 健康・安全・体力の保持増進と向上、2) 人間・人間関係の形成、3) スポーツの普及と振興。

続いて教育実践の現場については、「教育目標（伝授すべきこと）・教員の教授（伝授しようとしたこと）・学生の学習（伝授されたこと）」の3つに分化させる。具体的に「教育目標」は組織（この場合はT大学）が設定した教育目標、「教員の教授」は、教員が教育目標に基づき、実際に学生への指導現場で意識していた事柄について、「学生の学習」は、学生が学習した、学んだと認識した事柄について、それぞれその程度に着目する。

また調査対象とする教育実践の時期については、教員及び学生の記憶に依存する部分も多い為、大綱化以降における実践を対象とする。

2.2 研究方法

教育実践における目標、教員、学生の実態を明らかにした上で、三者間における整合・不整合性、またこれらと大学体育3つの枠組みとの整合・不整合性を考察していくことで、今後の大学体育の価値向上に向けた示唆を得ていく。

大学体育三大意義は先述した定義通りとし、また教育実践における教育目標については予備知識にて後述するものとして、ここでは教育実践における「教員による教授」及び「学生による学習」の方法について触れる。

研究方法はアンケート式の記述調査で、T大学で共通科目「体育」を受講した卒業生および担当した教員を対象に、1) 健康・安全・体力の保持増進と向上、2) 人間・人間関係の形成、3) スポーツの普及と振興、以上3つの観点からみた質問項目に対する学生の学習得点および教員の教授

得点についてそれぞれ行った。各調査は以下の手順で作成し、実施された。

2.2.1 卒業生対象の調査

1) 調査対象および時期

T大学における教養教育としての体育を在学時代に受講した（体育学部を除く全分野の卒業生）1974年度入学から2006年度入学まで約18,000名のうち、本研究の調査対象者として2,000名が入学年度や学部・学科の規模を考慮した系統抽出法によって選出された。そして宛先情報が不十分であった5名を除いて調査用紙1,995通を郵送にて配布した。発送は2010年2月9日で、回答期限は2月26日とした。このうち返送され、かつ分析が可能な有効回答者は520名であった。これらの回答のうち、本研究では大綱化以後に入学した386名について分析を行った。

2) 質問紙の作成方法

在学時代にどのような体育授業を受講したか、また体育授業を受講したことによってどのような影響を受けたかなどを明らかにすることを目的として、2002年度からT大学が実施している『『体育』の学生による授業評価』（橘 2005）を参考に以下の手順で作成された。

はじめに、T大学における体育に関する文献から、教育内容および教育効果に関するキーワードを抽出し（意味が曖昧なものや今回の調査の意図とは一致しないものは削除）、KJ法を参考に質問項目に用いるものを決定した。

続いてそのキーワードを用いた質問項目を設定し、調査対象者と同様の立場にある大学院生59名に対して予備調査を実施した。そしてその結果を大学体育教員で検討していくことで、最終的に40項目が採用された。なお、この予備調査への協力者は無作為に抽出され、本調査の対象者にはなっていない。

さらに本研究では、この40項目を前述の大学体育三大意義における各分野に再編成し直し、どの分野にも属さない12項目を削除した。その結果、「健康・安全・体力の保持増進と向上」に6

項目、「人間・人間関係の形成」に12項目、「スポーツの普及と振興」に10項目の計28項目が分析対象として抽出された。評価尺度は、6（とても思う）から1（まったく思わない）の6段階とし、これを「学習得点」とした。

2.2.2 教員対象の調査

1) 調査対象および時期

開学から調査時点までにT大学に所属し退職した教員は30名であった。このうち授業担当なし、あるいは諸事情によって回答を辞退した5名を除く25名に発送し、1名分は住所不明で返送されたため、合計25名に依頼し12名から回答があった。また調査当時、T大学に所属していた26名の教員に対しても同様に調査を実施した。このうちすべての質問項目に回答した者が22名（予備調査対象者2名を含む）であった。発送は2011年6月29日、回答期限は現役教員は7月9日、退役教員は7月16日とした。

2) 質問紙の作成方法

上記卒業生を対象とした調査の文言を教員用に変更した。評価尺度は、卒業生と同様に、6（とても思う）から1（まったく思わない）の6段階とし、これを「教授得点」とした。

2.3 予備知識

教育実践におけるT大学の教育目標については

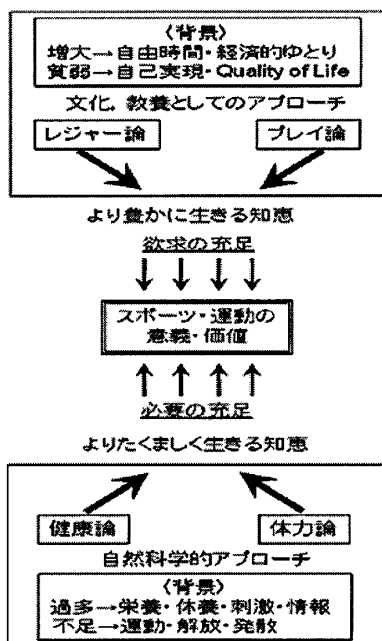


図1 T大学における大綱化後のカリキュラム概念（シラバス掲載版）

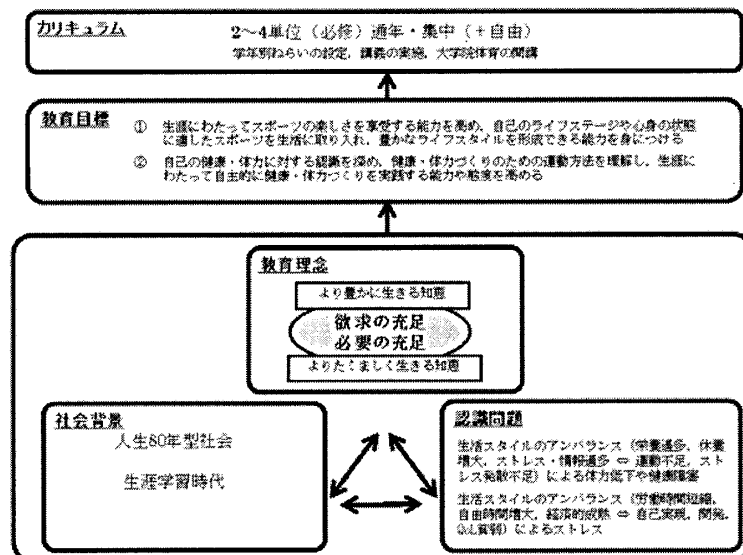


図2 T大学における大綱化後のカリキュラム概念

既に松田ら（2010）が研究を行っており、T大学の大綱化後のカリキュラム概念（図1：学内シラバス掲載）を更に詳細な構造図として抽出している（図2）。

この策定に関わり、図を作成した宮丸（2001）自身によると、その策定に当たっては「大学体育の目標を人間がスポーツ・運動をすることの意義と価値という面からとらえようとしたもの」であるとし、帰納的な方法論で考案したという。その結果、人間・人間関係形成という側面はやや弱くなり、健康、体力面（健康・体力論）及びスポーツの普及振興面（プレー・レジャー論）の2つが全面に押し出される結果となった。

2.4 統計解析

質問紙に対する回答は、すべて平均値±標準偏差で示した。各質問項目における学習得点と教授得点の比較には、対応のない検定を用いた。三大意義の各分野間の学習得点あるいは教授得点の比較には、一元配置の分散分析およびScheffeの多重比較検定を行った。各分野における学習得点と教授得点の関連を明らかにするために、ピアソンの積率相関係数を求めた。危険率5%をもって有意とした。

松田裕雄、吉岡利貢、河村レイ子、桐生習作、金谷麻理子、武田丈太郎、門野洋介／
大学体育の価値向上に向けた一考察 ―教育実践における目標・教授・学習に注目して

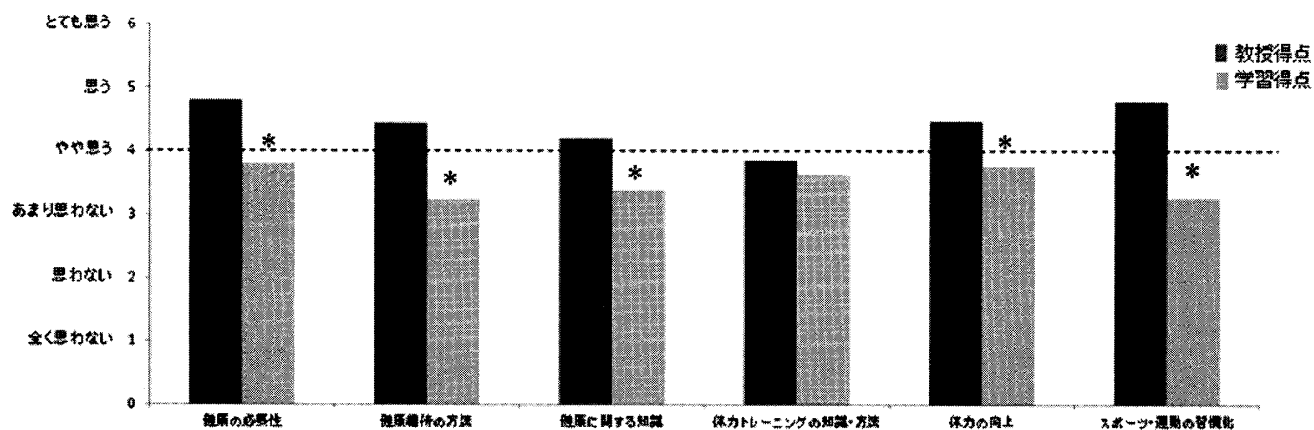


図3 「教授得点」と「学習得点」の比較（健康・安全・体力の維持増進と向上）

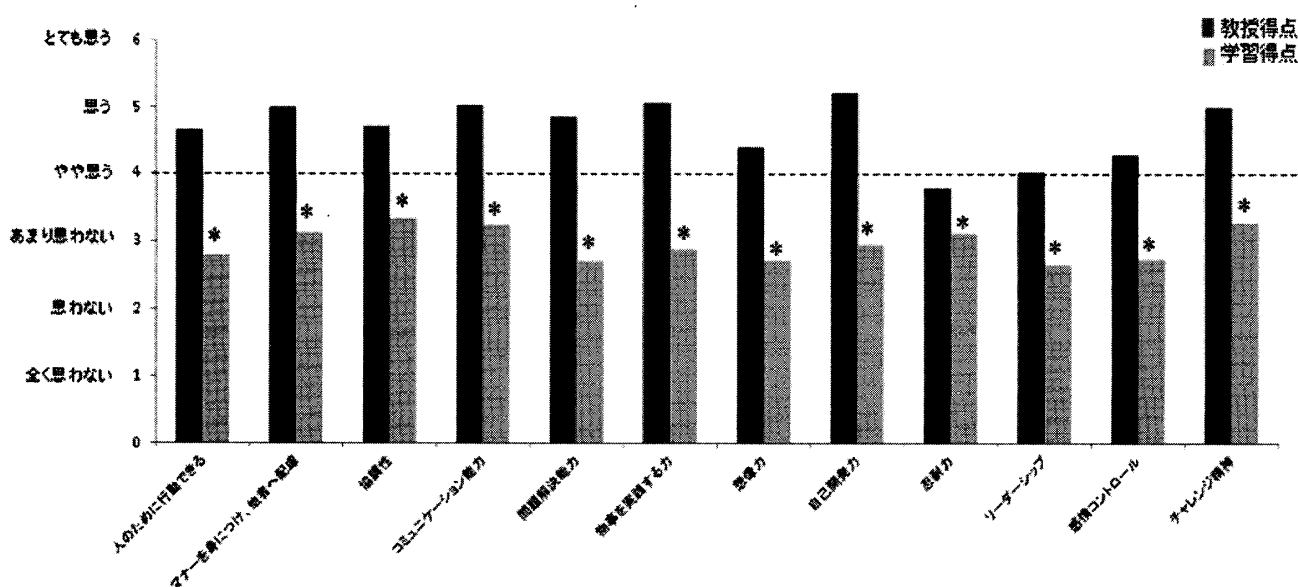


図4 「教授得点」と「学習得点」の比較（人間・人間関係の形成）

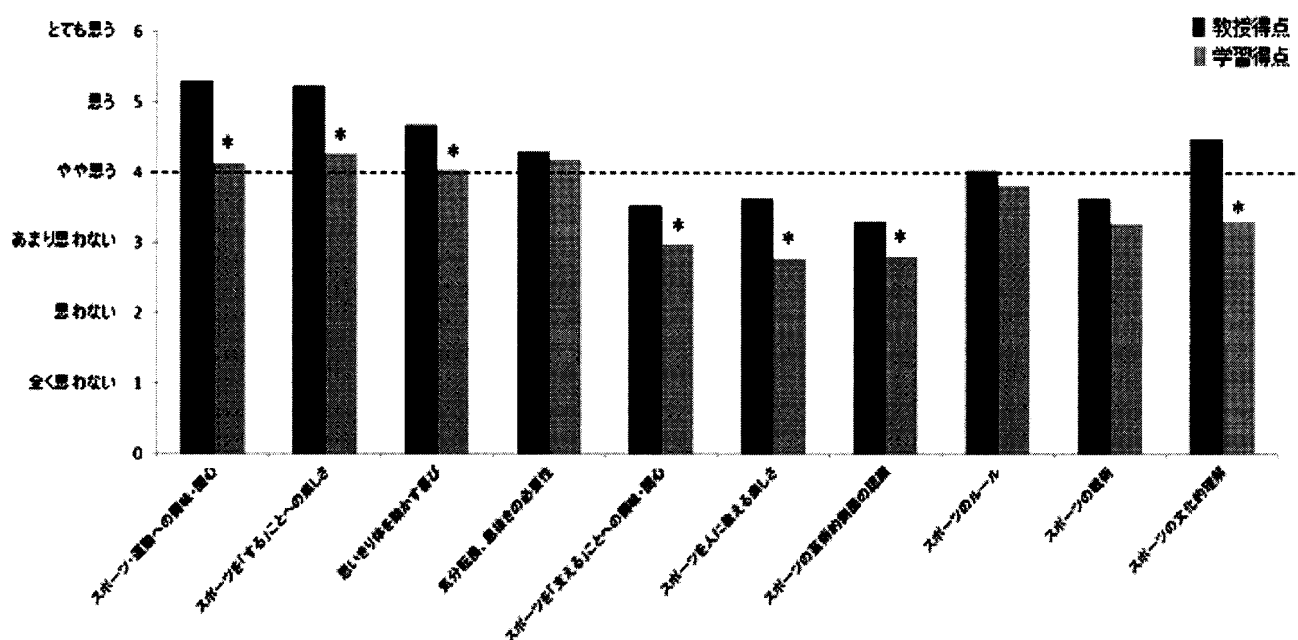


図5 「教授得点」と「学習得点」の比較（スポーツの普及と振興）

3. 結果

1. 教授得点と学習得点の差

「健康・安全・体力の保持増進と向上」における質問項目別の比較を示したのが図3である。「体力トレーニングの知識・方法」においてのみ教授得点と学習得点の間に有意な差が認められなかった。ただし、両得点の平均値はともに4点（やや思う）を下回っていた。この傾向は、その他の質問項目においても同様であり、特に「健康維持の方法」、「健康に関する知識」、「スポーツ・運動の習慣化」においてはきわめて低い学習得点を示した。

「人間・人間関係の形成」における質問項目別の比較を図4に示した。全ての項目において教授得点との間に有意な差が認められた。学習得点が全て4点より低く、「人のために行動できる」、「問題解決能力」、「想像力」、「リーダーシップ」、「感情コントロール」において極めて低い値を示した。一方、教授得点で4点を下回ったのは「忍耐力」のみであった。

「スポーツの普及と振興」における質問項目別の比較を図5に示した。多くの項目において教授得点と学習得点との間に有意が認められた。一方、「スポーツ・運動への興味・関心」、「スポーツをする楽しさ」、「思い切り体を動かす喜び」においては、教授得点、学習得点ともに4点を上回った。また、「気分転換、息抜きの必要性」については教授得点と学習得点の間に有意な差が認められなかった。

2. 大学体育三大意義の各分野における教授得点と学習得点の関係性

大学体育三大意義におけるそれぞれの分野の「教授得点」と「学習得点」を比較したのが図6である。全ての観点において、教授得点と学習得点の間に有意な差が認められた。また、「人間・人間関係の形成」において、教授得点が最も高い値を示したのに対して、学習得点は最も低い値であった。

図7に、各分野における教授得点と学習得点の関係を示した。「スポーツの普及と振興」においてのみ、教授得点と学習得点の間に有意な正の相関関係が認められた ($r = 0.85$)。

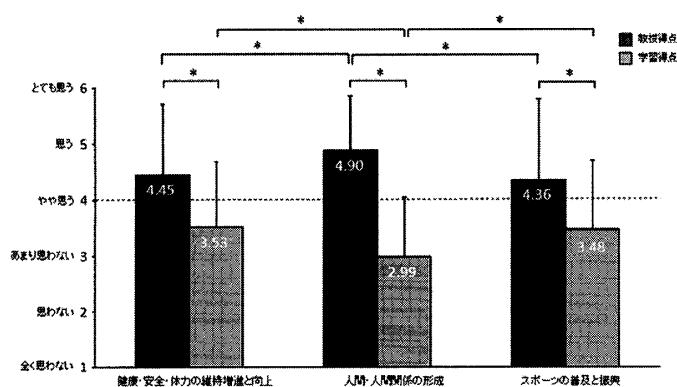


図6 三大意義の各分野における「教授得点」と「学習得点」の比較

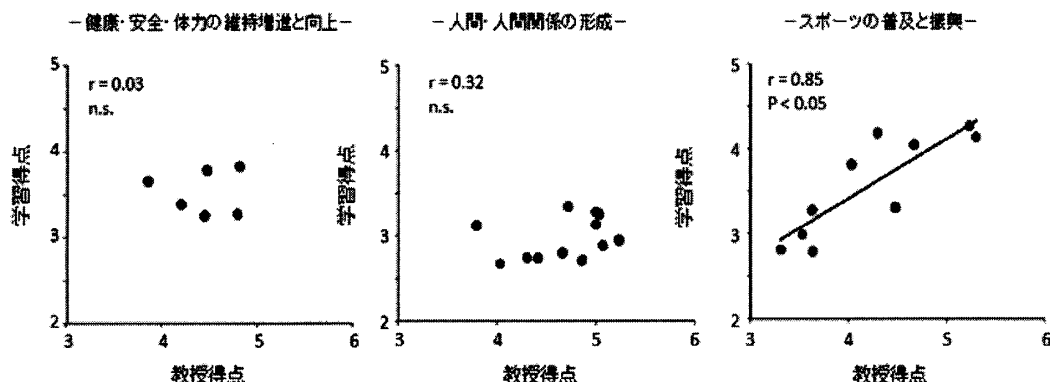


図7 「教授得点」と「学習得点」の関係

松田裕雄、吉岡利貢、河村レイ子、桐生習作、金谷麻理子、武田丈太郎、門野洋介／
大学体育の価値向上に向けた一考察 ―教育実践における目標・教授・学習に注目して

4. 考察

4.1 大学体育三大意義と目標の整合性について

T大学で掲げられていた教育目標（図1）、健康・体力論とプレー・レジャー論はまさに大学体育三大意義のうちの「健康・安全・体力の保持増進と向上」及び「スポーツの普及と振興」に合致するものであり、大学体育三大意義と目標との間に整合性が認められる。一方で、「人間・人間関係の形成」という意義に該当する教育目標は確認されなかった。

しかし主要中枢機関では、大綱化後90年代後半以降より大学体育の教養教育としての位置づけを前面に出し、現行の大学設置基準の教育課程の編成において「(前略) 大学は学部等の専攻に関わる専門の学芸を教授するとともに、幅広く深い教養及び総合的な判断力を培い、豊かな人間性を涵養するよう適切に配慮しなければならない」としている。これは三大意義のうち、おおよそ「人間・人間関係の形成」に該当する分野であると考えられるが、大綱化後にこのことを明記していないT大学の教育目標は、大学体育のこのような流れとは整合性が取れていないことが考察される。ただし、図6にもあるように現場の教員はこの点を体育授業の目標の1つとして掲げていることも伺えるため、何らかの共通理解が教員にはあったと考えられる。

4.2 各目標と教授・学習の整合性について

4.2.1 「健康・安全・体力の保持増進と向上」に該当する教育目標(健康・体力論)

図6より目標と教授の間には整合性が認められるが、図7より、それらが学習まで繋がる一貫性を持っているかどうかは不明瞭である。但し低い水準ではあるが、教員が伝えなくても伝わっているという傾向が窺えた背景には、小、中、高も含めた継続的な「体育」の教育実践において「体育」の教育内容が学習者に浸透した成果と考えられるであろう。しかし一方で、このことが大綱化までに大学体育に政府、主要中枢機関より向けられた

主な批判⁹⁾の1つである「高校体育のやきなおし」という論拠にもなった可能性も否定できない。

4.2.2 「スポーツの普及と振興」に該当する教育目標(プレー・レジャー論)

図6より目標と教授の間には整合性が認められ、また図7より教授と学習との間にも相関性が見られたことより、意義、目標、教授、学習までに一定の整合性と一貫性が見られたといえる。しかし図5より教員の教授と学生の学習における差は依然として顕著であり、相関性があるとはいえ、教員の教授意識に対する学習成果は依然として高い水準ではないということは見逃せない。

4.2.3 「人間・人間関係の形成」

先述したようにT大学の目標にはなかった為、ここでは目標と教授の間の整合性が図れない。但し、以下2つの不整合性が認められる。

1つ目は、先述したように目標として掲げられていないにも関わらず教育実践の現場においては、既に掲げられている2つの目標よりも顕著に高い教授意識で取り組まれていたということである。

2つ目は、最も高い意識で教授に取り組んでいるにも関わらず、学生の学習意識は他の2つよりも顕著に低かったということである。

目標として掲げられていないにもかかわらず教員の教授意識が高いという背景には、どのような理由があるのかは本研究では計り知れない。但しここで課題として挙げられるのは、教授から学習への一貫性、すなわち学生の「人間・人間関係の形成」を図る上での指導場面における教授方法や指導力であるといえるのではなからうか。

大学体育における教員の指導力不足を指摘する声は、大綱化までに大学体育に政府、主要中枢機関より向けられた批判やその後の識者の声において多々見られたことは先述のとおりである¹⁰⁾。こうした指摘が最も対象としていたことが大学体育三大意義の内、この「人間・人間関係の形成」に関わる分野における指導力不足であったかどうかは明確でないが、少なくとも他2分野と比較し、有意に学習成果が低いといえるこの分野における指導力が向上することは、今後の大学体育の価値

向上に貢献するということは言えるであろう。

4.3 「人間・人間関係の形成」を具体化する指導の原点

戦後我が国に大学体育が導入される原動力となった要素の1つに「米国教育使節団報告書」があることは周知の事実である。その草案¹¹⁾を創り戦後日本の学校体育の目指す姿とその改革案を具体的に展開したC.H.マックロイ（以下「マックロイ」）は、体育における正しいスポーツ技術の習得と技術認識の獲得の重要性を説いている。技術と技術認識に支えられたパフォーマンスから自己確認、他者認識、協力共同の精神やスポーツマンシップ¹²⁾が育まれ、これらが人格形成や社会的態度の形成に結実されてくるとしている。そして金子（1963）は、スポーツの主な価値はスポーツの精神すなわちスポーツマンシップにあるとし、「もしも学校スポーツの中にこの精神が存在しないならば、そこには何らの価値も意義も認められない」としており、こうした精神の源泉となる技術習得の重要性が改めて強調されている。

また金子（2002、2005）は、新しい動き方を身につけ、その習熟を高めていくプロセスにこそ、他の教科では代替えできない人間形成の為の独自の貴重な教育契機が提供されるとしている。そして学習行動の監視役に徹しがちな学校体育指導現場を否定し、教師には学生が自らの運動感覚身体との対話を成立させ、自らの身体で成功体験を感じ取っていくという運動文化の価値を伝承していくべく、彼らの運動感覚の世界を共有する共振的指導が必要であると説いている。

大学体育の教育実践における主な活動は実技指導である。実技指導において学生が正しい技術を習得し、身体運動について正しく認識することこそが「人間・人間関係の形成」に資する学習成果に繋がっていくという彼らの主張は、本研究で顕在化した問題、すなわち「人間・人間関係の形成」を具現化する教授力や指導力向上へ向け、一考の価値があるのではなかろうか。少なくとも、新しい技術の習得や、運動感覚の獲得というスポーツ

固有の価値、運動文化の価値を導出、伝承していくことではじめて顕在化してくる学習成果こそが、我が国で大学体育が必修化されるにあたって期待された事項の1つであったことを再認識することは原点回帰という意味では非常に意義深いものであるといえる。

5. 結語

5.1 T大学を対象とした教育実践の場で確認された事実

本研究では、大学体育三大意義が教育実践の場（教育目標・教授・学習）でどのように具現化されているのかについてT大学を対象とした調査を実施することで試みてきた。その結果、T大学における教育実践の場では以下のような事実が確認された。

（1）三大意義の1つ「健康・安全・体力の保持増進と向上」と教育目標、更に教授との間に整合性が確認されたが、教授意識と学習意識の間に明確な整合性は認められず、むしろ学習は高校以下の教育機関における成果水準を継続維持していることが推察された。

（2）三大意義の1つ「スポーツの普及と振興」と教育目標、更には教授意識から学習意識までの間に整合性と一貫性が認められたが、教授意識と学習意識の間においては低水準での相関性も認められる等、両者の差異は依然として大きい。

（3）三大意義の1つ「人間・人間関係の形成」に関しては、組織単位ではなく教員単位で高い意識を持って取り組んでいたが、学習意識は最も低かった。

以上の事実より、大学体育活動の更なる充実と価値向上に向けては、以下のようなことが課題の1つとして考えられる。

（1）大学体育三大意義を踏まえた教育実践の場を目的整合的に再設計し、教員の教授意識に組織としての一定の合意性及び一貫性を図っていくこと。

（2）三大意義と教育目標を具現化し、整合性の

松田裕雄、吉岡利貢、河村レイ子、桐生習作、金谷麻理子、武田丈太郎、門野洋介／
大学体育の価値向上に向けた一考察 ―教育実践における目標・教授・学習に注目して

高い学習成果を図っていく為の具体的な教授方法について研究を図っていくこと。

6.2 大学体育の価値向上に向けた展望

T大学を対象とした本研究を通じ、大学体育の価値向上へ向けた展望として以下3つを掲げることと締めくくりとする。

(1) 新制大学、第三の課題「人間・人間関係の形成」の具現化へのポジショニング

大綱化後90年代後半から現在にいたるまで、教養教育はますます高まりを見せている。こうした動きは新制大学における第三の課題が戦後約半世紀を経てようやく本格的に表出してきた1つの現象といえるのかもしれない。大学体育が正課必修となるにあたって期待された意義の1つに、こうした新制大学の新たな課題の達成が掲げられていたことは冒頭でも述べた。大学体育は、そもその原点であるこの意義を再確認することで大学教育における体育の役割について確固たる認識をもちポジショニングを図っていくことが、今後の取り組み姿勢として大切であろう。

(2) 技術の習得と技術認識から育む「人間・人間関係の形成」

新野ら(1991)は「技術と技術認識の獲得が軽視されることはスポーツの文化的価値の共有を通じた自己確証の獲得の不可能を意味し、従って自己否定と他者否定を意味する」としている。大学に体育が導入されるに至った教育概念の1つに「スポーツ技術の習得からの人格形成と社会的態度の形成」が存在していたことは先述のとおりである。教授法を充実していく前に、このように体育、スポーツによる「人間・人間関係の形成」が、正しい技術の習得から始まるというそもその原点を再認識していく姿勢が大切ではなかろうか。

(3) 体育・スポーツの研究拠点としての大学

新制大学に体育が導入された意義の1つに体育・スポーツの研究拠点を大学に作り出すことがあったことは先述のとおりである。佐藤は、「スポーツ研究の体系的な整理と、それらを背景とした現在及び将来の人間の教養の中身を明らかにした

教育内容を導き出すことこそ、今、私たちに問われていることだと言えよう」としている。

田崎(2002)や佐藤(1992)、千賀(2002)、宮丸(2001)は、体育・スポーツ固有の価値、及びこれが人間形成に及ぼす重要性を説いた上で、これを導いて行くカリキュラム開発の重要性を訴えている。特に千賀は、教育実践の現場におけるカリキュラムに対する議論や理解が十分でないことを指摘している。

林ら(2010)は「課題探求能力の育成を重視して実践されている教養科目において、大学体育授業の特性を活かし、学部・学科で求められる人材育成を考慮した多様な教授法略開発を試みることは、非常に効率的且つ有益な教育が実践されると推察される。教養教育における新たな教授方略の開発や充実が期待される。」としている。

本研究で明らかになった指導力の発展途上性、教授法の更なる充実に向けては、原点である三大意義を具現化していく教授法を日々追究していくことで、高い学習成果を発揮し教養教育に欠かさない存在へと体育の教育的価値を高めていくことが重要であろう。今後の研究活動が体育の効用論より実用論に傾斜していくことを願いたい。

謝 辞

本研究は平成22-24年度科学研究費基盤研究(A)「知の競争時代における大学体育カリキュラム再構築に関する実践的研究」(研究代表：宮下憲)による研究成果の一部である。記して感謝の意を表します。

注

1) 大学体育への批判や不要論は、大学体育発足当初からあり、以後ほぼ10年ごとに大きな問題として繰り返し頭をもたげてはしばらくして沈静化し、決して解消し去ることなく、今日でも疑義が識者の間に懷彼続いているというのが真相であるというべきであろう(水野1984)。千賀(2002)

は「高等学校のやきなおし、遊びの場の提供、やりっぱなしと言う政府や教育関係者及び国民からの酷評を受けている」と述べ、森田（2000）も高校の繰り返しであると指摘している。

2) 大学設置基準22条「大学における体育は、学生の健康を保持増進し、社会的、道徳的精神を涵養し、もって学生生活を豊かならしめる、さらに進んで、社会生活を価値あらしめる基礎を作るにあるを目的とする」(全国大学体育協議会 1973)。

3) 旧制・専門までは正課体育があったということにより、旧制高校の2、3年の年齢が新制大学の1、2年に相当するということ（田中 1986）。

4) 川村（1987）は、新制大学の3つの課題として旧来の「学術を教授されるもの」及び「学問の蘊奥を攻究するもの」に加え、「人間形成をするもの」を挙げている。

5) 無論これは大学体育教育者を批判する指摘ではない。むしろ受け皿としての大学教育全体にも、川村（1987）の言う第三の課題が十分に理解され浸透してなかった問題が大きく横たわっていることも抑えておかなくてはならない。田崎（2001）はこのことを受け、課題の前者2つに大学関係者も大学体育関係者も傾斜していたことに、大学体育の価値低迷があったことを指摘している。

6) 文科省は1998年大学審議会の答申において、教養教育の理念・目標を「学問の裾野を広げ、様々な角度から物事を見ることのできる能力、豊かな人間性を養い、自分の知識人生を社会との間で位置づけることのできる人材を育てる」ことと定義し、「主体的に変化に対応し、自ら将来の課題を探索し、その課題に対して幅広い視野から柔軟かつ総合的な判断を下すことのできる力」(課題探求能力)の育成を重視することが求められる（1998年大学審議会答申「21世紀の大学像と今後の改革方策について」第1章「21世紀初頭の社会状況と大学像」(3)大学改革の基本理念-個性が輝く大学-)。

7) 例えば「実技がレジャー・タイムとして浪費されており、体育の目的を果たしていない」、「教官任用に際して論文条件が重視され、優れた実技

指導者が欠けている」など（川村 1987）。

8) 例えば「体育教員の資質が問題だ」、「いいわけはききたくない」など(全国大学体育連合 1993)。

9) 1985年の時点で既に「優れた実技指導者が欠けている」とする報告が、国立大学協会「中間報告:大学の在り方について」でされている（川村 1987）。

10) 千賀（2002）、森田（2008）、篠田（2003）、田崎（2001）が整理している。主には ①選択科目で十分である。②健康教育効果が期待できない。③理論と実技が乖離している。④高校教育の繰り返し。⑤研究水準が低い。⑥保健授業は大型授業で十分な教授になっていない。⑦実技が単なるレジャー・タイムである。

11) 第一次米国教育使節団報告書における勧告となった草案「体育」と覚書「体育プログラム」を作成。女性を含む一般国民の学校外でのレクリエーション的な体育・スポーツ活動の普及発展とその中核としての学校体育プログラムの近代化の改革案を具体的に展開した（新村ら 1991、草深 1996）。

12) 広瀬（2002）や金子（1963）は、スポーツマンを「Good Fellow」「Good Loser」とし、スポーツマンシップを「尊重（respect）する」ことであるとした。それらは「最善を尽くし、勝って奢らず、負けて悔いない態度」「明朗・責任・謙虚・勇気・忍耐・同情・新設・友情・敬愛」と表現している。

引用・参考文献

- 浅田隆夫編（1985）学生のための保健体育教本、学術図書出版社。
- 朝岡正雄（1994）教科体育における運動学習の存在根拠に関する運動学的一考察，体育学研究, 39巻4号, pp.267-275.
- 遠藤卓郎（1991）大学教育における保健体育の意義，一般教育学会誌, 13巻2号, pp.1-7.
- 福岡孝純（1993）大学におけるスポーツの人間学的意義について，法政大学体育研究センタ

松田裕雄、吉岡利貢、河村レイ子、桐生習作、金谷麻理子、武田丈太郎、門野洋介／
大学体育の価値向上に向けた一考察 ―教育実践における目標・教授・学習に注目して

ー紀要,11号, pp.59-71.

古川勝 (2009) システム思考で見えてくる「大学体育」の目的と課題:STELIA/iThinkの紹介と活用例, 富山大学総合情報基盤センター広報,6号, pp.2-9.

林容一・森田啓・鬼澤陽子・西林賢武 (2010) 工学設計教育を意図した大学体育授業における教授方略の設定と評価, 大学体育学7号, pp.41-56.

林正人 (2004) 大学設置基準大綱化後の共通(教養)教育のかかえる問題, 大阪工業大学紀要 人文社会編,48巻1号, pp.13-26.

広瀬一郎 (2002) スポーツマンシップを考える, ベースボール・マガジン社.

飯塚鉄雄 (1989) 大学体育の意義:世界の大学体育の潮流, 日本体育学会大会号, 40巻A号, p.35.

上智大学保健体育研究室 (2000) 身体、そしてスポーツ文化の教養化に向けてー上智大学における保健体育科目の意義と位置づけー, 上智大学体育,33号, pp.1-3.

亀丸政利 (2006) 「大学体育」を考える, URL:http://www.iuk.ac.jp/topics/2006/tpc_061026_taiiku/index.html

金子明友 (2002) わざの伝承, 明和出版.

金子明友 (2005) 身体知の形成(上), 明和出版.

金子藤吉 (1963) コーチのためのスポーツモラル, 新体育学講座, 第14巻, 逍遙書院.

川口昭彦 (2005) 国立大学における教養教育の取り組みと評価-大学評価・学位授与機構の実情調査報告書と評価報告書から-, 大学評価・学位研究,1号, pp.5-17.

川口貢・石川旦・木村真知子・遠藤卓郎・浜野吉生・飯塚鉄雄 (1989) 大学体育の意義, 日本体育学会大会号,40巻A号, p.31.

川村毅 (1987) 大学体育の歴史, IDE現代の高等教育,7-8月号, pp.1-9.

茅野理子 (2006) 教養教育における体育実技の意義に関する考察, 宇都宮大学教育学部教育実践総合センター紀要,29号, pp.421-430.

木村真知子 (2005) 学校体育の存在意義に関する原理的考察, 体育学研究,50巻4号, pp.403-413.

北川薫・野川春夫・根岸紳・今村修・村上祐二 (2009) スポーツにおける大学の役割, 大学時報,329号, pp.16-31.

小林寛道・松島宏・山口順子・松岡信之・新名謙二・浅見俊雄 (1995) 新しい大学保健体育のあり方と教育内容、FDプログラムの開発に関する研究, 平成6年度科学研究費補助金総合研究(A)研究成果報告書.

小林寛道 (1995) 高齢者の体力と大学教育, 上智大学体育,28号, pp.73-90.

久保正秋 (2009) 意味生成としての「スポーツ運動」体験の意義, 体育学研究,54巻, pp.183-196.

栗須満 (2000) 日本体育(身体運動)・スポーツ再考Ⅰ-近代国家建設期における体育・スポーツ-, 京都精華大学紀要,18号, pp.22-37.

草深直臣 (1977) 戦後日本政策史序説-その1.戦後初期の体育政策-, 立命館大学人文科学研究所紀要,25号, pp.3-44.

草深直臣 (1983) C.I.E.体育担当官覚書にみる戦後初期の保健・体育・レクリエーション計画の総括と課題, 立命館大学人文科学研究所紀要別冊,2号, pp.117-154.

草深直臣 (1997) 体育・スポーツの戦後初期改革とCIE計画の形成過程, 体育学研究,41巻5号, pp.360-368.

草深直臣 (1996) 体育・スポーツの戦後改革に関する「第一次米国教育使節団報告書」の作成過程, 体育学研究,41巻2号, pp.59-67.

松田裕雄・吉岡利貢・河村レイ子・金谷麻理子 (2010) 日本における大学体育発祥の背景と理念に関する調査報告-GHQの戦後教育改革に着目して-, 科学研究費基盤研究(A)知の競争時代における大学体育カリキュラム再構築に関する実践的研究報告書.

松田裕雄,金谷麻理子,吉岡利貢,小田梓,吹田真士,川村卓,小山宏之,白木仁,橘直隆 (2010) 筑

- 波大学体育センターの教育事業におけるカリキュラム概念基本構造の変遷, 大学体育研究, 32号, pp.7-18.
- 松浦義行(1991) 大学教育における体育の意義, 筑波フォーラム, 31巻, pp.9-12.
- 松本秀夫・内山秀一・今村修・山下泰裕・天野聡(2003) 大学における体育科目のあるべき姿-2003年度の改革をふまえて-, 東海大学教育研究所研究資料集, 11号, pp.170-175.
- 松岡信之・徳山郁夫(1996) 大学教育における保健体育科目-教養としての位置づけ-, 一般教育学会誌, 18巻2号, pp.96-99.
- 峯重新二郎(1960) 大学体育の意義, 明治大学和泉校舎研究室紀要, 17号, pp.1-19.
- 宮丸凱史(2001) 筑波大学における共通体育のカリキュラム編成の経緯と今後の課題, 大学体育研究, 23巻, pp.49-61.
- 宮下充正(1993) 理想的な大学体育を実現するために, 体育の科学, 43巻1号, pp.4-5.
- 水野忠文(1984) 大学教育からみた教科保健体育の意義-国家的機関の大学体育に対する批判的見解との対応を通してこの教科の意義を考える-, 体育の科学, 34巻9号, pp.663-669.
- 水野哲也(1990) 健康と体力-大学における保健体育の今日的意義-, 東京医科歯科大学教養部紀要, 20巻, pp.23-38.
- 文部省(1970) 中央教育審議会答申, 高等教育の改革に関する基本構想案(中間報告).
- 文部省(1971) 中央教育審議会答申, 今日における学校教育の総合的な拡充整備のための基本的な施策について.
- 森田啓・林容一・引原有輝・谷合哲行・西林賢武(2009) JABEEに対応した教養教育としての体育授業: 学習・教育目標の統一と教育実践, 大学体育学, 6号, pp.101-110.
- 森田啓・引原有輝・谷合哲行・東山幸司・三村尚央・亀山巖・黒澤健太郎・林久仁則・松元剛(2011) 種目特性と授業形態を探究課題とした教養教育としての大学体育: フラッグフットボールと他大学との交流試合を事例に, 大学体育学, 8号, pp.75-88.
- 森田啓・林容一・引原有輝・谷合哲行(2008) 大学体育は「健康」を学習目標にすべきか: 大学教育における体育の位置づけに関する考察, 30巻2号, pp.129-135.
- 森田啓・永木耕介・荒木勉・千駄忠至・小林篤・岡秀郎・寺岡敏郎・三野耕・後藤幸弘・松下健二・山本忠志・本多靖浩・畑野裕子・高田俊也(1994) 本学の教養教育における「体育実技」の理念と内容の試案, 兵庫教育大学紀要, 14号, pp.66-77.
- 森田啓(2000) 大学体育の意義・役割に関する一考察, 大学体育研究, 22巻, pp.1-8.
- 日本体育学会体育原理専門分科会編(1991) 大学教育改革と保健体育の未来像-大学体育改革のための必読資料集-, 不昧堂出版.
- 野坂和則(1989) 大学の保健体育実技に対する学生の意識と評価「大学保健体育実技の意義を問う」, 横浜市立大学紀要体力医学編, 17号, pp.9-25.
- 野崎武司(1996) 大学体育と主体形成, 香川大学教養教育研究, 1号, pp.129-135.
- 大道等(1998) 私の職業を決めた教養体育~その25年後の陰り, バイオメカニクス研究, 2巻1号, pp.66-71.
- 大塚隆・光本健次・田村修治・今村貴幸(2002) 大学体育で何を学かⅢ-必修としての意義を問う-, 東海大学教育研究所研究資料集, 10号, pp.183-188.
- 大塚隆(1999) 教養教育としての体育に関する考察-信頼関係形成の観点から-, 東海大学紀要開発工学部, 9号, pp.23-31.
- 齋藤雄志(2002) システム思考と知識の構造化, 専修ネットワーク&インフォメーション, 2号, pp.1-27.
- 佐藤善治(1992) 一般教育としての保健体育の意味, 大学と教育, 4号, pp.22-31.
- 千賀康利(2002) 教養教育としての体育-運動生理学の立場から, 大学創造, 12号, pp.36-43.
- 篠田邦彦(2003) あいまいな教養の体育: デイ

松田裕雄、吉岡利貢、河村レイ子、桐生習作、金谷麻理子、武田丈太郎、門野洋介／
大学体育の価値向上に向けた一考察 ―教育実践における目標・教授・学習に注目して

シプリンと教育はだれのために、何を指した
たものか、体育原理研究, 第33号, p 107.

(社)全国大学体育連合・(社)日本体育学会・(社)
日本女子体育連盟・日本体力医学会・全国体
育系大学学長・学部長会・日本教育大学協会
保健体育・保健研究所部門 (2010) 体育系
学術団体からの提言2010 21世紀の高等教育
と保健体育・スポーツ(資料編), URL:[http://
www.daitairen.or.jp/about/pdf/20100916
teigen_2010_material.pdf](http://www.daitairen.or.jp/about/pdf/20100916teigen_2010_material.pdf).

新野守・草深直臣 (1991)『第一次米国教育使節
団報告書』におけるC.H.マックロイの役割,
立命館教育科学研究, 1巻, pp.147-162.

橘直隆 (2005) 2002・2003年度学生による授業
評価の報告, 大学体育研究, 第27号, 99.pp.77
-85.

田中菊子 (1986) 大学保健体育の意義について
の一考察, 東洋女子短期大学紀要, 18巻, pp.87
-101.

田崎健太郎 (2002) 大綱化に伴う筑波大学内の
「体育」の必修, 選択論争, 筑波フォーラム,
62号, pp.49-52.

田崎健太郎 (2001) 大学体育の設置基準の規制
緩和を巡る論議に関する研究, 大学体育研究,
23巻, pp.1-16.

徳山郁夫・松岡信之 (1997) 体育における<知
>の展開-自己発見に向けて-, 千葉大学教
育学部研究紀要 I 教育科学編, 45号, pp.95
-101.

筑波新大学創設準備会 (1973) 筑波大学の創設
準備について-まとめ-.

筑波大学 (1980) 筑波大学の基本構想

筑波大学体育センター (1994-2009) 平成6~21
年度共通科目「体育」教育課程

筑波大学体育センター大学体育研究会編 (1977)
大学体育教本, 不昧堂出版.

全国大学体育協議会 (1973) 大学体育10年の歩
み, 全国大学体育協議会 (再版).

共通科目「体育」に関するアンケート調査

1) 氏 名 :

2) T大学在職期間

年 月 ~ 年 月 計 年間

3) 担当科目 (集中を含む)

- ・ 定時 (必修/自由) :
- ・ 集中 (必修/自由)、演習、講義 :
- ・ 大学院 :

4) 専門スポーツ種目 :

5) 研究領域 :

<回答についての留意点>

以下の設問に対する回答は、キーワードや箇条書きでも結構です。なお、時期によって考えが異なっている場合は、その時期を明記した上でそれぞれの内容をお書き下さい。

1. 運動・スポーツにはどのような価値があるとお考えですか? ご自身の専門種目に特化して「ある」という場合には、そのことについてもお書き下さい。

2. 1でお答えいただいたような価値に触れることで育成される「人物像」や「人としてのあるべき姿」等についてお答え下さい。

松田裕雄、吉岡利貢、河村レイ子、桐生習作、金谷麻理子、武田丈太郎、門野洋介／
大学体育の価値向上に向けた一考察 ―教育実践における目標・教授・学習に注目して

3. 現在、授業を行う際に、視野に入れている社会背景や社会問題等がありましたら、お書き下さい。また、その内容が1や2の回答と密接な関係がある場合には、その関わりについても簡単にご説明ください。(2にお答えいただいた方のみお答え下さい)

4. これまでのご回答を踏まえて、ご自身の授業における教育目標は総じてどのようなものであるかを具体的にお答え下さい。

5. 4でお答えいただいた教育目標達成に向けて、具体的にどのような授業を実践されているかについて、方法と内容という観点より簡単にお書き下さい。

6. 1～5のご回答を用いて、ご自身の実践されている授業をイメージ図で表すとすればどのようなようになりますか？ご自身のお考えをお書き下さい。

7. その他、大学における教養教育としての「体育」やT大学における「体育」のあり方や存在意義について、ご意見がありましたら、お書き下さい。

松田裕雄、吉岡利貢、河村レイ子、桐生習作、金谷麻理子、武田丈太郎、門野洋介／
大学体育の価値向上に向けた一考察 ―教育実践における目標・教授・学習に注目して

8. 以下の項目についてお聞きします。現在、ご自身が行っている「体育」はどのような授業であると思いますか？ 該当する番号に○をお付けください。

1: まったくそう思わない 2: そう思わない 3: あまりそう思わない 4: ややそう思う 5: そう思う 6: とてもそう思う

(1) 健康の必要性を感じさせる	1	2	3	4	5	6
(2) スポーツのルールを学ばせる	1	2	3	4	5	6
(3) 問題解決能力を身につけさせる	1	2	3	4	5	6
(4) 人のために行動できるようにする	1	2	3	4	5	6
(5) 気分転換、息抜きの必要性を感じさせる	1	2	3	4	5	6
(6) スポーツを「支える」ことへの興味・関心を広げる	1	2	3	4	5	6
(7) スポーツの文化的理解を深める	1	2	3	4	5	6
(8) 物事を実践する力を身につけさせる	1	2	3	4	5	6
(9) 健康維持の方法を理解させる	1	2	3	4	5	6
(10) スポーツの戦術を理解させる	1	2	3	4	5	6
(11) 協調性を身につけさせる	1	2	3	4	5	6
(12) 自然に親しむ態度を養わせる	1	2	3	4	5	6
(13) 体力を向上させる	1	2	3	4	5	6
(14) スポーツ・運動への興味・関心を広げる	1	2	3	4	5	6
(15) コミュニケーション能力を身につけさせる	1	2	3	4	5	6
(16) 創造力を養わせる	1	2	3	4	5	6
(17) スポーツを人に教える楽しさをわからせる	1	2	3	4	5	6
(18) 教養としての体育・スポーツの意義を理解させる	1	2	3	4	5	6
(19) 感情をコントロールできるようにする	1	2	3	4	5	6
(20) チャレンジ精神を身につけさせる	1	2	3	4	5	6
(21) スポーツの芸術的側面を認識させる	1	2	3	4	5	6
(22) スポーツを「する」ことの楽しさをわからせる	1	2	3	4	5	6
(23) 自己と向き合い、開発していく力を身につけさせる	1	2	3	4	5	6
(24) 思いきり体を動かす喜びを感じさせる	1	2	3	4	5	6
(25) 体力トレーニングの知識や方法を理解させる	1	2	3	4	5	6
(26) 忍耐力を身につけさせる	1	2	3	4	5	6
(27) リーダーシップを発揮できるようにする	1	2	3	4	5	6
(28) マナーを身につけ、他者へ配慮できるようにする	1	2	3	4	5	6
(29) 健康に関する知識を身につけさせる	1	2	3	4	5	6
(30) スポーツ・運動を習慣化させる	1	2	3	4	5	6

ご協力ありがとうございました。

Ⅰ 大学学部生時代に受講した「体育」の授業に関するアンケート

【Ⅰ】 あなた自身のことについて、以下の質問にお答えください。

選択肢のある項目については、該当するものに○をお付け下さい。

- (1) 性別 1. 男性 2. 女性
- (2) 年齢 1. 20 歳代 2. 30 歳代 3. 40 歳代 4. 50 歳代
- (3) Ⅰ大学（学部）入学年度 西暦 _____ 年 _____ 月
- (4) 学部生時代の所属学部・学科 _____ 学部 _____ 学科
- (5) 最終学歴 1. 学部卒業 2. 修士課程 修了・退学 3. 博士課程 修了・退学
- (6) 学群生時代の所属サークル（例：テニス同好会、軽音楽サークルなど 複数回答可）

- (7) 学部生時代に受講した体育の必修単位数 _____ 単位 1. 多い 2. 適切 3. 少ない
- (8) 学部生時代に受講した体育の科目（例：テニス、バレーボールなど 複数回答可）

- (9) 現在の職業
1. 会社員 2. 会社役員 3. 教員・教育関係 4. 公務員（教員以外）
5. 団体職員 6. 自営業 7. 契約社員、派遣社員 8. パート、アルバイト
9. 専業主婦・主夫 10. 学生 11. 無職 12. その他（ ）
- (10) 現在の日常生活における運動習慣（身体運動やスポーツの種目、運動様式などは問いません。）
1. ほぼ毎日 2. 週3・4回程度 3. 週1・2回程度 4. 月に2・3回程度
5. 年に数回程度 6. まったくしていない

【Ⅱ】 学部生時代に受講した「体育」について、以下の質問にお答え下さい。

Ⅱ-1. 学部生時代を振り返って、あなたが受講した「体育」の授業は満足できるものでしたか？

以下の項目について、該当する番号に○をお付けください。

	非常に不満	不満	やや不満	やや満足	満足	非常に満足
(11) 授業展開全体について・・・・・・・・・・	1	2	3	4	5	6
(12) 開講科目(種類・数)について・・・・・・・・	1	2	3	4	5	6
(13) 科目選択方法について・・・・・・・・・・	1	2	3	4	5	6
(14) 授業の雰囲気について・・・・・・・・・・	1	2	3	4	5	6
(15) 担当教員について・・・・・・・・・・	1	2	3	4	5	6
(16) 授業内容について・・・・・・・・・・	1	2	3	4	5	6
(17) 体育施設・設備について・・・・・・・・・・	1	2	3	4	5	6
(18) 講義について(受講経験者のみ)・・・・・・・・	1	2	3	4	5	6
(19) 自由科目について(受講経験者のみ)・・・・・・・・	1	2	3	4	5	6
(20) 集中授業について(受講経験者のみ)・・・・・・・・	1	2	3	4	5	6

松田裕雄、吉岡利貢、河村レイ子、桐生習作、金谷麻理子、武田丈太郎、門野洋介／
大学体育の価値向上に向けた一考察 ―教育実践における目標・教授・学習に注目して

Ⅱ-2. 学部生時代を振り返って あなたが受講した「体育」はどのような授業であったと思いますか？
以下の項目について、該当する番号に○をお付けください。

	まったく 思わない	思わない	あまり 思わない	やや 思う	思う	とても 思う
(21) 健康の必要性を感じた・・・・・・・・	1	2	3	4	5	6
(22) スポーツ・運動が習慣化した・・・・・・・・	1	2	3	4	5	6
(23) スポーツのルールを学んだ・・・・・・・・	1	2	3	4	5	6
(24) 問題解決能力が身についた・・・・・・・・	1	2	3	4	5	6
(25) 自己の身体への気づきがあった・・・・・・・・	1	2	3	4	5	6
(26) スポーツ技術を向上させることができた・・	1	2	3	4	5	6
(27) 人のために行動できるようになった・・	1	2	3	4	5	6
(28) 気分転換、息抜きの必要性を感じた・・	1	2	3	4	5	6
(29) 自分の健康を管理できるようになった・・	1	2	3	4	5	6
(30) スポーツを「支える」ことへの興味・関心が広がった・	1	2	3	4	5	6
(31) スポーツの文化的理解が深まった・・	1	2	3	4	5	6
(32) 物事を実践する力が身についた・・	1	2	3	4	5	6
(33) 健康維持の方法を理解した・・・・・・・・	1	2	3	4	5	6
(34) 生涯スポーツの必要性を感じた・・	1	2	3	4	5	6
(35) スポーツの戦術を理解した・・・・・・・・	1	2	3	4	5	6
(36) 協調性が身についた・・・・・・・・	1	2	3	4	5	6
(37) 自然に親しむ態度が養われた・・・・・・・・	1	2	3	4	5	6
(38) 体力を向上させることができた・・	1	2	3	4	5	6
(39) スポーツ・運動への興味・関心が広がった・	1	2	3	4	5	6
(40) コミュニケーション能力が身についた・	1	2	3	4	5	6
(41) 創造力が養われた・・・・・・・・	1	2	3	4	5	6
(42) プロポーションづくりに役立った・・	1	2	3	4	5	6
(43) スポーツを人に教える楽しさがわかった・	1	2	3	4	5	6
(44) 教養としての体育・スポーツの意義を理解した・	1	2	3	4	5	6
(45) 感情をコントロールできるようになった・・	1	2	3	4	5	6
(46) チャレンジ精神が身についた・・・・・・・・	1	2	3	4	5	6
(47) スポーツの芸術的側面を認識できた・・	1	2	3	4	5	6
(48) スポーツを「する」ことの楽しさがわかった・	1	2	3	4	5	6
(49) 運動の必要性を認識した・・・・・・・・	1	2	3	4	5	6
(50) 自己と向き合い、自己を開発していく力が身についた・	1	2	3	4	5	6

	まったく 思わない	思わない	あまり 思わない	やや 思う	思う	とても 思う
(51) 安全にスポーツを行う能力が身についた・	1	2	3	4	5	6
(52) 思いきり体を動かす喜びを感じた・・・・	1	2	3	4	5	6
(53) 体力トレーニングの知識や方法を理解した・	1	2	3	4	5	6
(54) 忍耐力が身についた・・・・	1	2	3	4	5	6
(55) スポーツ技術の習得方法がわかった・	1	2	3	4	5	6
(56) スポーツ・運動を継続するきっかけとなった・	1	2	3	4	5	6
(57) リーダーシップを発揮できるようになった・	1	2	3	4	5	6
(58) スポーツを「見る」ことの楽しさがわかった・	1	2	3	4	5	6
(59) マナーを身につけ、他者へ配慮できるようになった・	1	2	3	4	5	6
(60) 健康に関する知識が身についた・・・・	1	2	3	4	5	6

Ⅱ-3. あなたの現在の生活や考え方に T大学で受講した「体育」がどの程度、良い影響を及ぼしていると思いますか？

以下の項目について、該当する番号に○をお付けください。

	まったく 思わない	思わない	あまり 思わない	やや 思う	思う	とても 思う
(61) 健康の維持増進の必要性の認識について・	1	2	3	4	5	6
(62) 体力の維持増進の必要性の認識について・	1	2	3	4	5	6
(63) スポーツ・運動の習慣化について・・・・	1	2	3	4	5	6
(64) 生涯スポーツの必要性の認識について・	1	2	3	4	5	6
(65) スポーツ・運動を楽しむ態度について・	1	2	3	4	5	6
(66) スポーツ技術や戦術の理解について・・・・	1	2	3	4	5	6
(67) スポーツの多面的価値の認識について・	1	2	3	4	5	6
(68) 人間関係や社会との関係について・・・・	1	2	3	4	5	6
(69) 人間力について・・・・	1	2	3	4	5	6
(70) 心の健康について・・・・	1	2	3	4	5	6

※要望や改善すべき点なども含め、あなたがT大学で受講した「体育」に対するご意見をお聞かせ下さい。(71)

松田裕雄、吉岡利貢、河村レイ子、桐生習作、金谷麻理子、武田丈太郎、門野洋介／
大学体育の価値向上に向けた一考察 ―教育実践における目標・教授・学習に注目して

【Ⅲ】これからの日本の大学教育における「体育」について、以下の質問にお答えください。
該当する番号に○をお付けください。または自由記述にてお答えください。

	まったく思わない	思わない	あまり思わない	やや思う	思う	とても思う
(72) 大学に体育は必要である・・・	1	2	3	4	5	6

※その理由をお答えください。(73)

※大学で「体育」を実施するとすれば、以下のどれが適していると思いますか。

(74) 卒業要件として

1. 必修科目がよい 2. 選択（自由）科目がよい 3. どちらでもよい
4. その他（具体的に)

(75) 授業実施形態として（複数回答可）

1. 通年授業がよい 2. 学期完結制の授業がよい 3. 集中授業がよい
4. その他（具体的に)

※大学での「体育」に望むことや期待することなど、ご意見をお聞かせ下さい。(76)

※その他、ご意見・ご感想等ありましたらご自由にご記入下さい。

アンケートはこれで終了です。ご協力ありがとうございました。